

# 徳島市常三島遺跡 平成 13 年度埋蔵文化財調査概要報告書

北常三島地区総合グラウンド管理舎・器具庫の配水管工事に伴う  
埋蔵文化財立会・測量調査

2002 年 3 月 13 日

徳島大学施設委員会  
徳島大学埋蔵文化財調査室

## 1. 調査の概要

- (1) 遺跡の名称 徳島市北常三島遺跡
- (2) 遺跡の所在地 徳島市北常三島町3丁目（徳島大学総合グラウンド）
- (3) 調査の契機 管理舎・器具庫の下水道管付け替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（工事立会・試掘調査）
- (4) 調査面積 約 100 m<sup>2</sup>
- (5) 調査期間 平成14年2月21日から平成14年3月1日（2週間）
- (6) 調査主体 徳島大学施設委員会（委員長 齋藤史郎徳島大学長）
- (7) 調査担当 徳島大学埋蔵文化財調査室（室長 北條芳隆総合科学部助教授）
- (8) 調査員 北條芳隆（室長・調査員）、堺圭子（施設部技術補佐員）

## 2. 調査の目的

北常三島地区にある総合グラウンドは、絵図によれば江戸時代の前半以降、蜂須賀蔵人下屋敷等の屋敷地（拝借地）が置かれた場所である。ただしこれまで当該地区での掘削工事等はおこなわれなかったため、遺跡としての遺存状況は未確認であった。こうしたなか、平成13年度にはグラウンド管理舎および器具庫の排水管付け替え工事が計画された。そのため当調査室では、工事立会調査を兼ねて当該地区の包含層の状況を確認することとした。工事に伴う掘削深度は、現地表面から60cmと浅いものであったが、遺跡としての遺存状態を確認するために、施設部および施行業者の協力をえて一部100cm以上の掘削を実施することとした。

また、総合グラウンドの西側境界部分に沿って、幅6m、高さ1～2m前後の規模の土手が遺存している。絵図との照合の結果、この土手は城下町境界部分に巡らされた江戸時代の土塁の名残であると推測された。したがって今回の調査では、この土手の現状を資料化することも目的のなかに含めることとした。

## 3. 調査経過

工事に先立ち施設部との協議をおこない、文化財保護法57条の1に沿った埋蔵文化財調査届けを徳島県教育委員会宛に提出することとして準備を開始した。土手部分にかんしては土地の所有者が国（管轄は国土交通省河川局）、機能管理者が徳島市（下水道保全課）であることが判明したので、関係者と協議し、2月6日付けで土手部分の立木（葦）伐採と測量調査の許可をえた。

調査は2月21日から開始し、重機で工事掘削深度の60cmまでの掘り下げをおこなう。グラウンド造成時の客土が20cm程度の厚さで認められたが、その下方は、砂を主体とし細かな粘土ブロックを斑状に含む客土の堆積層であった。この客土は3北側から南側に下降する傾斜を持ち、色調や有機質の混じりかたの差異によって、上下2層に分層が可能である。下層になるにしたがって、砂の構成粒子は粗くなり粗砂がベースとなる。遺物の包含はほとんど認められな

い。さらに下方へと掘下げたところ、地表下 80cm のところで湧水があり、それ以上の掘削は不可能となった。

トレンチの南端部では、砂の客土が薄く覆う下方から粘土質の堆積が認められたので、その部分を深く掘り下げたところ、明治期から昭和初期にかけて機能したらしい溝の肩を確認した。この遺構が今回の調査で確認しえた唯一のものである。遺物のほとんども、この溝内出土のものである。江戸時代の遺構は確認できなかった。

2月26日午後からは土手の測量調査を開始し、3月1日には全作業を終了した。

#### 4. 調査成果

##### (1) 近代の溝

トレンチの南端部で南北に延びる溝の東側肩部を確認した(図3)。粘土層を切り込む形で緩やかに掘り込まれ、斜面の一部には、不規則的ではあるが、平瓦を敷いているかのような状況が見受けられた。埋土中からは多量の陶磁器類が出土したが、製作年代は近代に属するものが圧倒的に多く、わずかに近世に溯るものが含まれていた。規模や形状からみて、武家屋敷廃絶後に、現在の土手の東側に設置された溝であろうと推定される。

この溝の下層に、近世の包含層が遺存する可能性は高いが、深掘りをした部分では厚い粘土層であった。この粘土層下にどのような遺構が遺存しているのか、この点についての手がかりはえられなかった。

写真2には溝内埋土からの出土遺物を示してある。写真2-①は近代の遺物、写真2-②には江戸期に溯る可能性のあるものを示した。

##### (2) 土手

立会調査に引き続き、現在も残る土手の測量調査を実施した(図4)。江戸期に設けられた城下町外側境界線の一部を踏襲した現存遺構であり、現状で総延長 178m をはかる。北端部を起点としておよその長さを示すと、南へ 62m 延びたところでL字状に屈曲し、西に向かって 68m 延びたのち、再び直角に南へと屈曲して 48m 延びるといった状況である。北端部は新規に造成された道路によって埋め立てられ、南端は民家によって削平されている。

この遺構の重要性を指摘した橋本達也氏(2000年度まで本学埋蔵文化財調査室助手、現鹿児島大学助教授)によれば、絵図にこの土手の表現が現れるのは、寛政2年(1790)以降の作成のものに限定されるとのことである(橋本2001)。このことから、土手は18世紀代の城下町整備にかかわる遺構であろうと推定されており、この段階において橋本氏が想定する城下町整備の画期と連動させうる可能性が示唆されている。ただし遺構の性格は、城下町の外郭を明示するというような視覚的効果を想定するよりも、土手の東側に新規造成された屋敷地へと通じる唯一の道路であり、上げ潮時における城下への水の進入を阻止するための現実的機能を担った堤でもあったとの解釈のほうが自然なので、その意味を現時点の材料のみで断定するにはいたらない。石尾和仁氏の指摘される、18世紀後半段階における「出水」記録の頻出(石尾1999)とのかわりも考慮しつつ、総合的な評価が求められるところであろう。

現状の土手の規模は、もっとも残りのよいと判断される南北方向から東西方向への屈曲地点

付近で計測して、下端の幅 6 m、上面の幅 3 m、高さ 1.5 m で、上面には北端付近と東端付近の 2 カ所において、松の植樹が認められる。切り株のみの遺存を含めると、それぞれの場所に 25 m から 30 m 程度の間隔をおいて 2 株ずつの松が植えられていたようである。このうち 3 年ほど前に切り倒されたという根株に残る年輪を数えると、80 年以上（120 年前後）の樹齢であったことを確認できる。ただし、この松の植樹が江戸期からのものかどうかは不明というほかない。絵図をみると、この土手は東側一帯に造成された屋敷地への唯一のアクセス路であったと推定するのが自然だからである。松の植樹がなされたとすれば、この屋敷が廃絶され、土手の上面が路地としての機能を失った後のことではなかろうか。

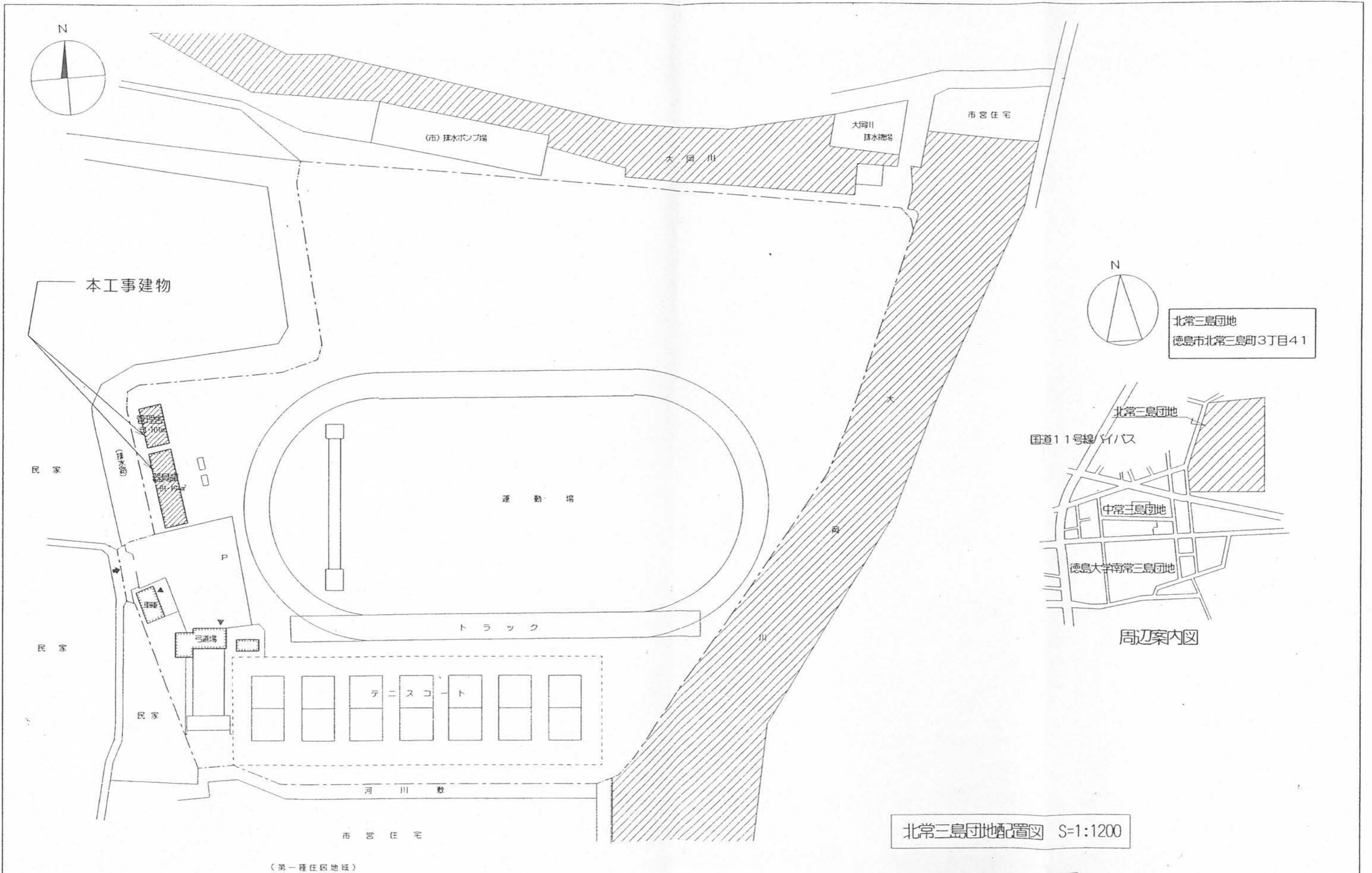
土手に平行して、現在は幅 2 m から 3 m 前後の溝が設けられており、降雨時には総合グラウンド一帯の排水路として機能している。この溝を江戸期のものと評価する声もあったが、今回の立ち合い調査によって、グラウンド側の造成土は相当に厚いことが確認されたこと（つまり溝のグラウンド側の肩はグラウンド造成後に新たに形成されたものであること）と、徳島市下水道局から入手した下水管の埋設図（図 5）によって、可能性はないことが判明した。溝部分の地下 3 m から 4 m の場所に、管の内法にして 1.5 m の規模の大型下水道管が埋設されており、北常三島一帯の基幹下水道となっていることが確認されたからである。このような大規模埋設工事を実施する際には相当量の排土もあったに違いなく、この時点で土手部分にも、一部掘削や盛土の追加など、改変の手が及んだ可能性を考慮しておく必要がある。

いずれにせよ、江戸時代城下町地割りにまつわる遺構が、当時の面影をいくばくかはとどめながら本学の総合グラウンドに隣接して現存することの意義は、歴史的景観保全の点で大きく、今後とも重視すべきものと思われる。

#### 引用文献

石尾和仁 1999 「徳島城下町の考古学的研究」『史窓』29 号 徳島地方史研究会

橋本達也 2001 「常三島の土手」（シリーズ徳島に遺る阿波②）『四国徳島城下町通信』第 6 号



敷地面積	建築面積	延べ面積	建ぺい率	容積率	全学生数	学部等名	団地番号	団地名	所在地	学校番号	学校名	作成年度
41,265㎡	521㎡	521㎡	1.3%	1.3%	0人	総合運動場	007	北常三島団地	徳島市北常三島町3-41	0344	徳島大学	H13

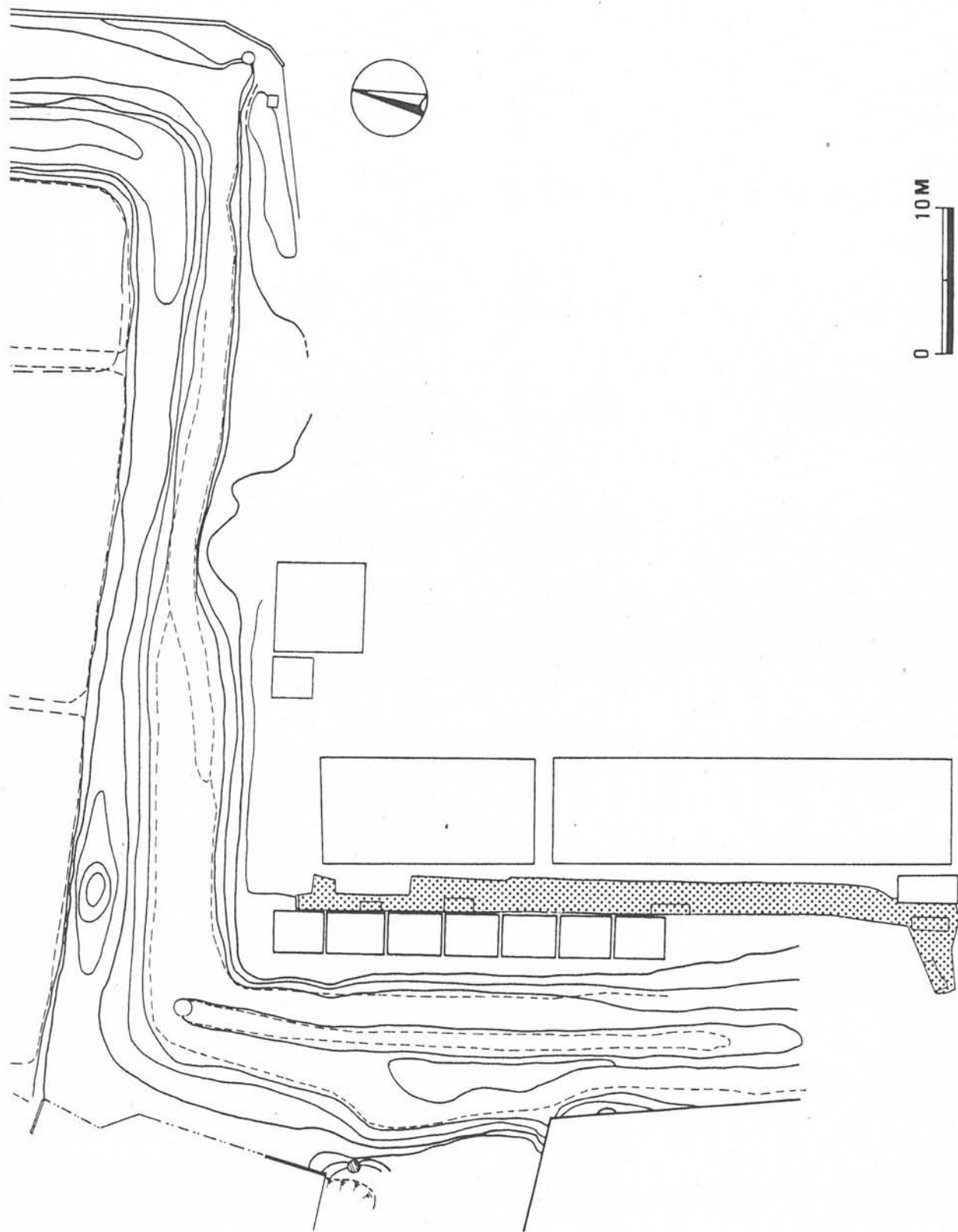


图2 掘削場所位置图

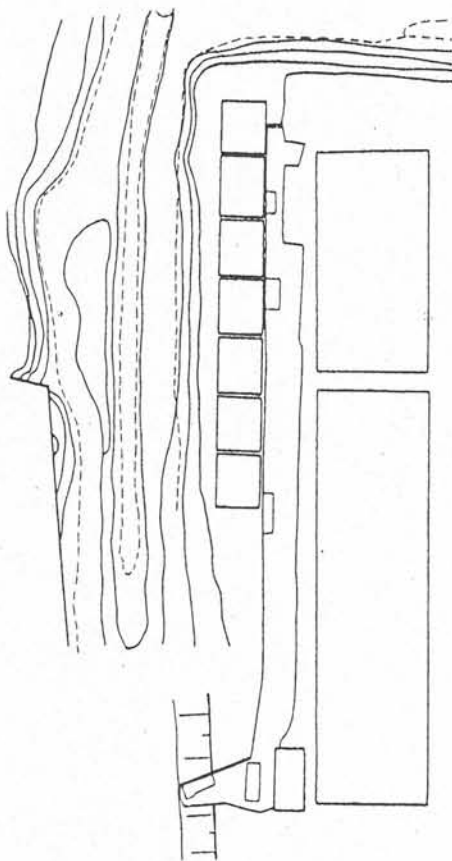
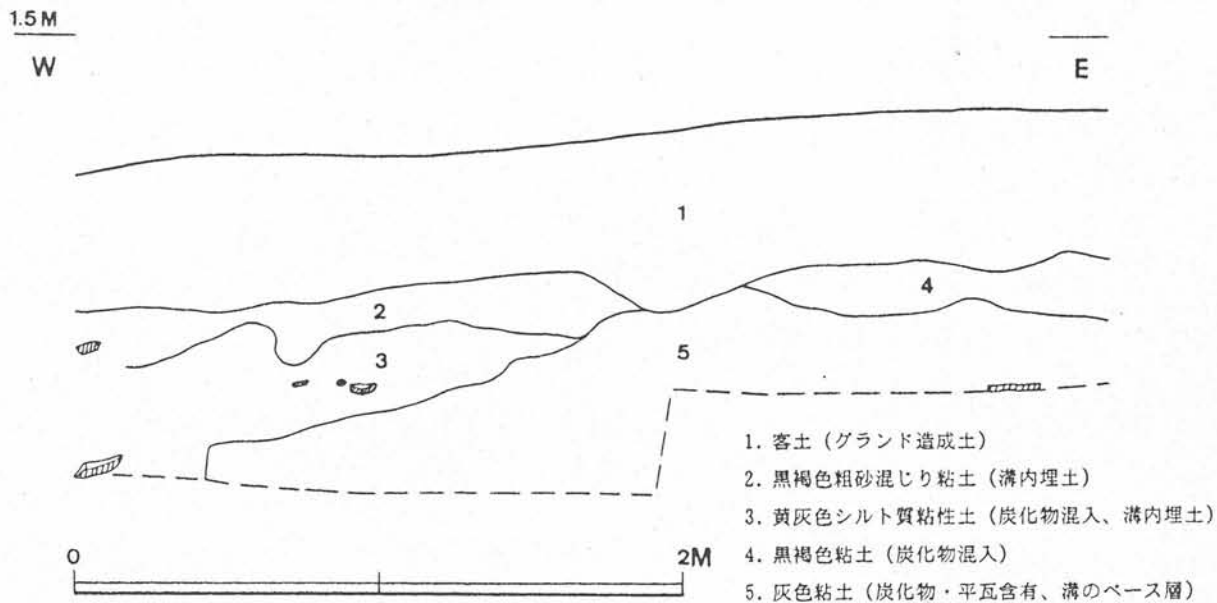


図3 明治期の溝 (土層断面図)

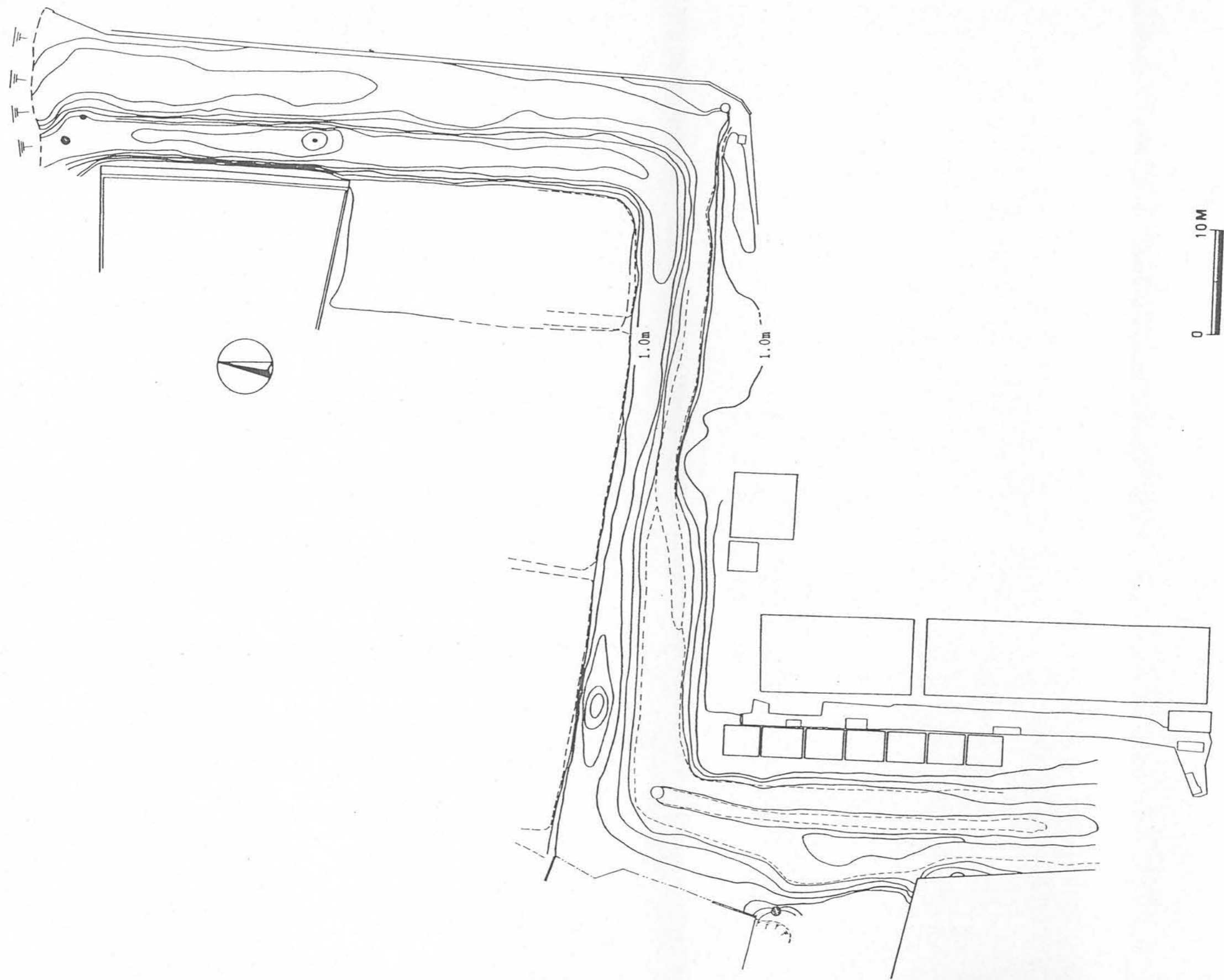


图4 土手測量図



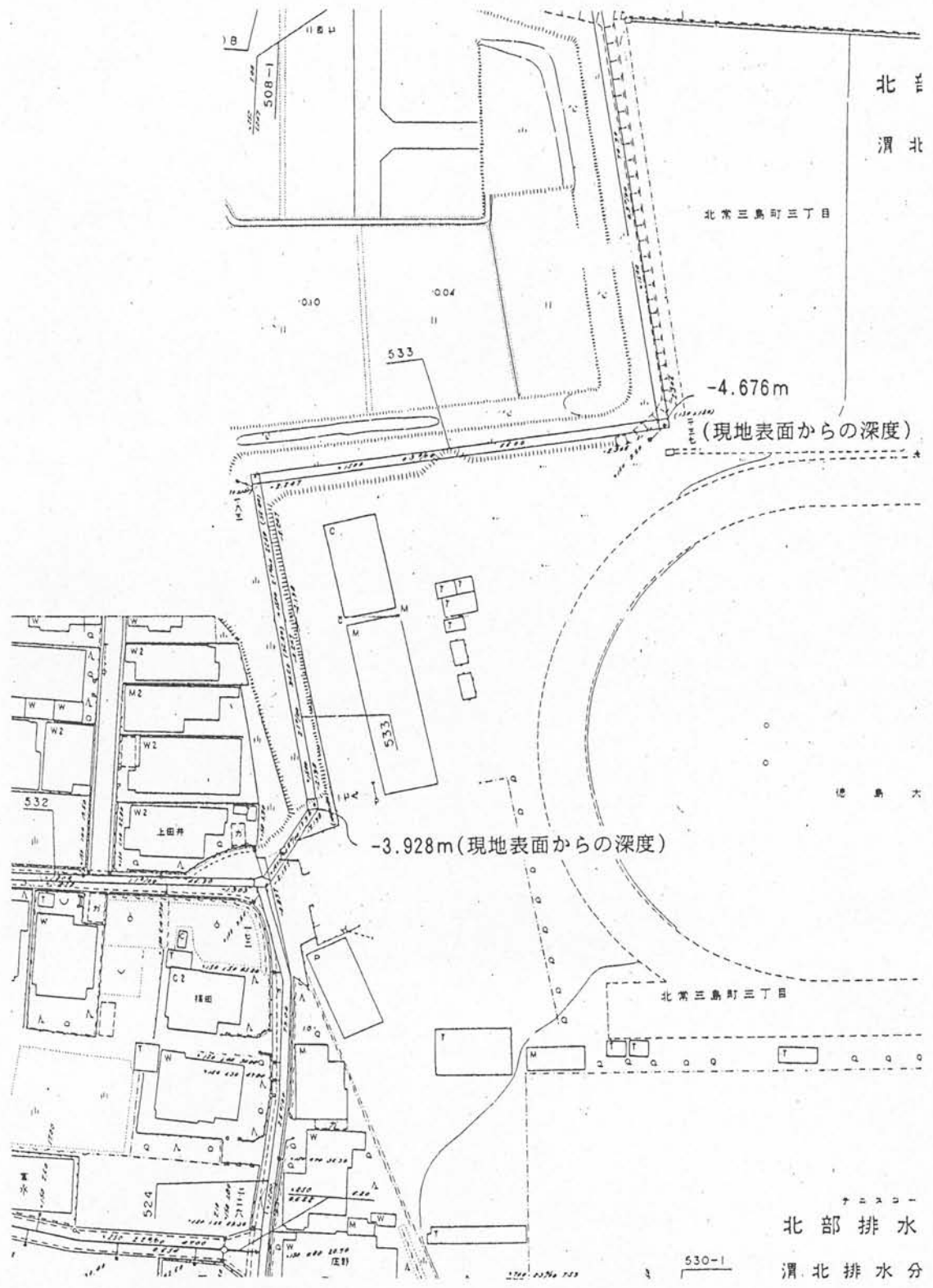


図5 下水道管理設位置図 (徳島市下水道保全課より)



①調査区全景（北から）



②トレンチの状況



③造成土と湧水



①出土遺物（近代）



②出土遺物（近世）



①東から



②西から



③北端部（南から）